

佐賀大学地域学歴史文化研究センター
自己点検・評価報告書
(令和元年度)

令和2年12月

令和元年度の活動に関する自己評価

(1)教育

- ア) 教養教育を所管する全学教育機構との連携をすすめた。具体的にはインターフェース科目「佐賀の歴史と文化」企画・担当である。
- イ) 上記のほかe-ラーニングなど、学内他部局と連携し教育活動を実施した。
- ウ) センター内に閲覧室を設け、歴史・文化・郷土史関係の書籍・資料を約 2,400 点配置し、学生・市民の利用に供したほか、研究成果を展示室にて公開した。
- エ) 佐賀県立図書館との共催で市民向けの古文書講座を 16 回開催した。
- オ) 佐賀市立図書館と共催公開講座「私が教えた佐賀の歴史と文化 100 分集中講義」を 3 回開催した。

〈自己評価〉

本センターは設立以来、研究成果を教育活動へ活用してきた。所属教員が積極的に他部局の授業にかかわり、学生への教養・専門教育を実施したほか、本学所蔵の歴史資料やデータベースを用いるなど工夫に務めた。

社会教育の面では、古文書講座・公開講座を自治体と共催などにより開催し、佐賀の歴史文化研究について、市民の理解が深まるよう努めた。特に佐賀県立図書館の古文書講座はセンター専任教員 2 人とも担当しており、同館との連携を強化している。

(2)研究

- ア) 佐賀大学附属図書館所蔵「小城鍋島文庫」の歴史関連資料から、小城藩における文芸活動や京都(皇室・公家社会)との関係を研究し、成果を小城市との共催展「京の雅と小城藩」を開催して市民に還元したほか、研究図録を刊行した。
- イ) 地域学歴史文化研究センターで収集した史料の研究・公開推進のため、『古文書に見る鍋島直正の藩政改革(二)』を、低平地研究会と共同で刊行した。
- ウ) 地域学研究の基礎的情報を蓄積するため、野中家・山本家・東光寺の史料調査を実施した。
- エ) 第 13 回地域学シンポジウム「地域史料を世界へー史資料のウェブ公開とオープンデータ化ー」を、人文科学とコンピュータ研究会および国立歴史民俗博物館メタ資料学センターと共催した。
- オ) 所属教職員のほか、佐賀地域歴史文化に関する学外研究者の成果をまとめた研究紀要第 14 号を刊行した。
- カ) 佐賀学ブックレット第 8 冊『青年藩主鍋島直正ー天保期の佐賀藩ー』を刊行した。
- キ) 研究プロジェクト「地域歴史資料の共有化による学際的研究および歴史情報活用推進プロ

ジェクト」を実施し、小城藩日記データベースのデータ追加やシステム更新をすすめた。

ク) 文献学・国文学研究部門の教員が中心となって「小城鍋島文庫研究会」を運営し、附属図書館所蔵の古典籍の研究を進めた。

ケ) 第9回在来知歴史学国際シンポジウムを後援した。

コ) 伊藤昭弘准教授は科研費基盤研究(C)「旧藩貸付金からみる幕末期の藩と地域経済の循環構造」(研究代表者、令和元～3年度、元年度直接経費700千円)、基盤研究(B)「日本列島における鷹・鷹場と環境に関する研究」(研究分担者、平成28～令和2年度、100千円)、同「巨大塩田地主野崎家史料の総合的研究」(研究分担者、令和元～5年、206千円)を獲得した。三ツ松誠講師は科研費若手研究(B)「国学者西川須賀雄と神道国教化の時代」(研究代表者、平成29～令和2年度、700千円)、基盤研究(C)「小城鍋島文庫蔵典籍の解題目録と蔵書印データベースの作成」(研究分担者、平成30～令和3年度、20千円)、基盤研究(B)「感情体制」と生きられた感情—エゴドキュメントに見る「近代性」(令和元～5年度、370千円)を獲得している。ほかセンター特命教員・研究員も、科研費を得ている。

〈自己評価〉

前年度までと同規模の研究成果、研究費獲得を達成することができており、今後も継続・増加をはかる。また小城藩日記データベースは第8回ゲスナー賞(丸善雄松堂主催)デジタルによる知の組織化部門銀賞、デジタルアーカイブ学会実践賞を受賞するなど、高い評価を得た。

(3) 国際交流・地域貢献

ア) 小城市教育委員会との共催展「京の雅と小城藩」を開催し、佐賀大学附属図書館『小城鍋島文庫』の研究のほか、センターにおける研究成果を市民に公開した。

イ) 上記共催展に伴い講演会を2回開催した。

ウ) 佐賀県との共催古文書講座を開催した。

エ) 佐賀市との共催公開講座を開催した。

オ) データベースにより山本家文書など佐賀県関係古文書のデータを公開した。

カ) みやき町の公開講座に協力し、センターより講師を派遣した。

キ) ウェブサイトを公開し、センター事業の紹介や研究成果の発表を行った。

ク) 中国の研究者との国際シンポジウム(第9回在来知国際シンポジウム)を後援した。

ケ) 佐賀県教育委員会と共催で講演会「発掘された佐賀—発掘成果速報2019—」を開催した。

また講演会にあわせ、発掘品の展示会を開催した。

〈自己評価〉

展示・講演会・公開講座の開催による研究成果の市民・地域社会への還元、国際シンポジウムの後援など、本年度も大きな成果をあげることができた。

(4)組織運営

- ア)令和2年3月現在専任教員2名、併任教員4名、特命教員3名、同研究員1名、教務補佐員1名、事務補佐員1名、研究員1名を配置し、センター長を中心とした円滑な組織運営・研究活動に努めた。
- イ)各学部から選任された委員、附属図書館長・総合情報基盤センター長など本センターの業務に関わる部局の部局長など学長が必要と認めた委員、本センター長・副センター長・専任教員・部門長により構成する運営委員会(学部の教授会に相当)を2回開催し、センター運営に関わる事案の審議を行った。
- ウ)センター専任・併任教員による会議を2ヶ月に1度開催し、センターの運営について検討した。
- エ)上部機関となった教育学系と人事・予算執行などについて協議し、今後の運営体制を確認した。

〈自己評価〉

組織運営はこれまで同様円滑にすすめることができた。特に教育学系との連携を強化した。